

Café des open



三浦一族

Menu

第20回

泊船庵

文／谷合伸介（横須賀市立中央図書館 郷土資料室）

鎌倉時代後期から南北朝時代にかけて、横須賀には泊船庵（はくせんあん）という草庵がありました。泊船庵は同時期に活躍した禅僧夢窓疎石（むそうそせき）が仏門に励んだ庵で、元応元年（1319）から3年半ほどこの地に滞留しました。夢窓疎石は、後醍醐天皇や足利尊氏らが帰依した高僧としても知られています。

文保2年（1318）、京都北山に身をおいていた夢窓疎石は、鎌倉幕府第14代執権北条高時の生母覚海円成尼（えんじょうに）から関東に迎え入れたい旨を伝えられます。しかし、仏道につとめたい彼はこれを避けるように土佐国に吸江庵（ぎゅうこうあん）を建て、そこに籠もりました。しかし、諦めきれない円成尼は、再度関東に来るよう招請し、断りきれなくなった夢窓疎石は、鎌倉の勝栄寺という寺院に入ります。しかし、夢窓疎石は人が訪ねてきても固く門を閉ざし誰とも会うことはありませんでした。その後、鎌倉を避け、彼が行き着いた先は横須賀でした。海を望む美しい景観であった横須賀は、仏道に励みたいと願う夢窓疎石の思いにふさわしい地であったのかもしれない。ここに泊船庵を構えると、夢窓疎石のもとには彼を慕う公家や僧侶らが会いに訪れました。例えば、公家の藤原為相（ためすけ）は泊船庵を訪れ、和歌のやり取りを行っています。為相は、『十六夜日記』（いざよいにっき）の作者として知られる阿仏尼（あぶつに）の子で、京と鎌倉間をたびたび往来し、関東の歌壇において重きをおかれた歌人でした。一方、のちに室町幕府第3代将軍足利義満の政治的顧問の立場につき、相国寺の建立に関わったことでも知られる春屋妙葩（しゅんおくみょうは）は、夢窓疎石の甥でその弟子でもあった関係から、夢窓疎石とともに泊船庵で暮らした経験をもちました。

元亨3年（1323）、夢窓疎石は約3年半過ごした泊船庵を離れ、上総国の退耕庵へと移ります。泊船庵は、史料上14世紀後半まで存続していたことが確認できますが、その後どうなったのかはよくわかっていません。夢窓疎石が横須賀を去ろうとした際、彼は「其庵の檀那三浦安芸前司貞連」に和歌を送っています。「檀那」とは庵の庇護者のことであり、「三浦安芸前司貞連」こそ、泊船庵が所在した横須賀郷の領主と考えられています。この貞連は、のちに室町幕府侍所頭人（さむらいどころとうにん）をつとめた三浦貞連と同一人物であることが有力視されており、夢窓疎石はその庇護を受け、泊船庵で仏道に励んでいたのです。

では、その泊船庵は具体的にどの付近にあったのでしょうか。右記の横須賀村絵図に、「白せん」と記された場所が見えるように、江戸時代までこの周辺には白仙

山という山がありました。泊船庵は、この山の付近にあったとされます。白仙山は、横須賀製鉄所建設時に削られ、当時の面影はありませんが、現在の在日米海軍基地内に位置していたと考えられます。

一方、江戸時代の地誌『新編相模国風土記稿』によれば、横須賀村の小名（こな／村を小分けした名のこと。小字。）の中には、「塔ヶ谷」と「堂ヶ塚」という地があったといい、「塔ヶ谷」には泊船庵の後山に建てられた三重塔の跡があったと伝えられること、「堂ヶ塚」には廃壊した泊船庵の屋材が埋められたと伝えられることなどが記されています。明確には分かりませんが、「塔ヶ谷」は下記絵図の「とうの谷」、「堂ヶ塚」は同絵図の「十日塚」にあたる可能性も考えられます。

このように、江戸時代の文献資料の記述からは、この一帯にかつて泊船庵があったことが窺われます。また、この場所の対岸には、鎌倉幕府第3代将軍源実朝が花見に訪れたのではないかとされる桜山（逸見～汐入付近、見晴山とも呼ばれる）もありました。そうしたことを踏まえると、この一帯は海を望む景勝地として、中世の人々から愛されたスポットだったといえるのかもしれない。

参考文献：『新横須賀市史 資料編 古代・中世 I』（2004年）、同市史『通史編 自然・原始・古代・中世』（2012年）

文化8年（1811）横須賀村絵図（一部抜粋、加筆）



【横須賀市自然・人文博物館蔵】